

組織的な若手研究者等海外派遣プログラム報告書

氏名： 増田 和也	提出日：平成 23 年 8 月 2 日
東南アジア研究所における職名：研究員（グローバルCOE） *右記の該当する職位に○をつけて下さい。（講師・助教・助手・ <u>ポスドク</u> ・博士課程学生・修士課程学生・学部学生）	
派遣先の研究機関等（調査を実施した国名・機関名（日本語で記載）及びカウンターパート名）： インドネシア共和国・リアウ大学理学部、Ahmad Muhammad氏 *派遣先の研究機関等の種類について右記の該当する箇所に○をつけてください。（ <u>大学</u> ・研究機関・企業・その他）	
派遣先の研究機関等での職名：Special Researcher	
派遣期間：平成 23 年 6 月 15 日 ～ 平成 23 年 7 月 21 日（派遣日数：37 日）	
研究活動等の主な内容（該当する番号に○をつけてください。複数可） ①研究・実験 <u>②フィールドワーク</u> <u>③セミナー</u> ④インターンシップ ⑤サマースクール等の講習 ⑥学会出席 ⑦単位取得等 ⑧その他	
研究活動の主な領域（該当する番号に1つ○をつけて下さい。） <u>①人文学</u> ②社会科学 ③数物系科学 ④化学 ⑤工学 ⑥生物学 ⑦農学 ⑧医歯薬学 ⑨総合領域 ⑩複合新領域	
<p>派遣の概要（500～700字程度）</p> <p>森林は人類にとって多様な価値をもつ空間であり、同一の森林領域をめぐり、複数のエージェントの間で葛藤が生じることが多い。これに対して人類は、対面的な交渉から法制度の確立にいたるまで様々な手段と論理によって調整してきた。本研究では、個人や集団が特定の空間領域を占有するための働きかけのあり方や程度を「領有性(territoriality)」と定義し、これを分析上の概念とする。これまで申請者は、個人・集団が特定空間を恣意的に切り分ける際の「境界」の形成過程・形態・維持のあり方に注目しながら、インドネシア、リアウ州内陸部（プララワン県）の森林地帯を対象として、1) 生態的および社会的・政治的要因の双方からの領有性の生成と展開、2) 在地と外部由来の二つの領有性原理の接合・再編成、を検討してきた。本研究では、これまでの研究成果に新たな資料を補足することで分析を深めるとともに、申請者の問題関心と研究成果をより広い視点から位置づけ、人類学あるいは地域研究の分野で一般化・理論化を図ることが大きな目標である。今回の派遣では、リアウ沿岸部の泥炭湿地帯の村落を対象にフィールドワークをおこない、村落の開拓史や自然利用の変容についての資料を収集した。沿岸部社会では漁労や交易が生業の中心となり、広い範囲の人びとの移動が見られる。また、泥炭湿地帯では近年まで開発が大きく遅れ、村落の開拓プロセスをたどることが比較的容易である。さらに、調査対象地はマレー半島を対岸とするマラッカ海峡に面しているため、植民地政庁や政府による領有性がより色濃く現れる地域であり、申請者がこれまで対象としてきた内陸部とは異なる条件・背景をもつ。こうしたことをふまえながら、両者の比較により内陸部の事例にもとづいた議論を相対化することを目指した。</p>	
<p>事業に係る研究成果（500～700字程度）</p> <p>現地調査は、同プログラムによる、これまでの派遣で調査対象としてきたリアウ州の沿岸部に位置するブンカリス県ブキット・バトゥ郡タンジュン・ロバン村で実施した。世帯調査によりこれまでの調査結果の追加・補足をおこなうとともに、キー・インフオーマントである老人から同村落の開拓の歴史や過日の生業についてより詳細な聞き取りをおこなった。その結果、1) 同村は1990年代半ばまで「陸の孤島」状態であったが、1960年代から1970年代にかけて油脈探索や木材伐採のために大量の人びとが一時的に移入するなど、人口の移出入が頻繁であったこと、2) 同地域ではマレー半島との合法・非合法の交易が2000年代中頃まで続いていたが、こうしたマレー半島との関係性が住民の商品作物の導入にも大きく関係していること、がわかった。また、ジャカルタやプカンバル市の図書館や新聞社（Kompas紙およびRiau Pos紙）資料室で文献や過去の新聞記事を閲覧し、当該地域で起きた出来事の背景と展開、とくに政府によるインドネシア・マレーシア間の違法交易の取り締まり強化の過程などについての資料を収集した。なお、7月19日には西ジャワ州チビノンのインドネシア科学院（LIPI）において、本研究所グローバルCOEプログラムとの共同で国際ワークショップ” Sustainable Management of Bio-resources in Tropical Peat-swamp Forest” が開催され、これまでのフィールドワークで収集したデータをもとに泥炭地域における開拓過程について発表した。今後は収集した資料を読み込んでいくとともに、沿岸部および泥炭湿地帯という立地条件に関連した領有性の形成過程とその展開について検討し、論文としてまとめていく予定である。</p>	